

# 低音デュオ 3rd LIVE

## "Le tuba rencontre..." vol.7

2010年11月4日@門仲天井ホール

.....

出演：

松平 敬【バリトン】 <http://matsudaira-takashi.jp/>

橋本晋哉【テューバ、セルバン】 <http://shinyahashimoto.net>

演奏曲目：

ミシェル・ゴダール編：「我深き淵より」による即興  
Michel Godard ed.: Improvisation on "De Profundis"

橋本 晋哉：海峡、あるいは我深き淵より（2010、初演）  
Shinya Hashimoto: Détroit ou "De Profundis"

松平 敬：天井のコラール（2010、初演）  
Takashi Matsudaira: Ceiling Choral

ベルナール・カルロゼマ：エオリアンヌ（1986）  
Bernard Carloséma: Éoliennes

田中 吉史：科学論文の形式によるデュオ（2009 / 2010 改訂初演）  
Yoshifumi Tanaka: Duo in the Form of Scientific Article

～～ 休憩 ～～

松平 頼暁：ホワイ・ノット？（1970）  
Yori-Aki Matsudaira: Why not?

鈴木 治行：沼地の水（2009）  
Haruyuki Suzuki: Swamp Water

松平 頼暁：ローテーション I（2010、委嘱初演）  
Yori-Aki Matsudaira: Rotation I

## 委嘱作品・楽曲解説

### 田中吉史：科学論文の形式によるデュオ

バリトンとチューバが学会発表をする。この手の学会ではまああることなのだが、研究領域の専門化が進みすぎて、内容を完全に理解できる人はほとんどいない。聴衆の多くは、部分的にしかわからない彼らの発表を、ひたすら続く音の流れとして体験している — まるで音楽のように。「科学論文の形式によるデュオ」は、このような体験をシミュレートしたものだともいえる。科学論文（この作品においてより厳密に言えば、実験心理学における論文）の書き方というのは、細かいところまで様式化されており、この作品もそれに従っている。すなわち、全体は「概要」(abstract)、「目的」(purpose)、「方法」(method)、「結果」(results)、「考察」(discussion)、「結論」(conclusion)より構成されており、細部に関しても所定の様式に従っている。なお、ここではある記憶実験が報告されているが、学術的な研究報告としてではなく、我々は科学論文と共通した構成を持つ別のものとして聴かれることを望んでいる — まるで音楽のように。昨年の「低音デュオvol.2」で発表されたが、今回はさらに推敲された形での発表が行われる。【田中吉史・記】

### 鈴木治行：沼地の水

なぜかここ2、3年、言葉を扱う作品を書く機会が増えていて、その都度、言葉（イメージ）と音の関係をどうするか、といういつもの問題が頭をもたげる。その時、なるべくなら、伝統的に言葉の意味性に寄り添いそれを増幅する、ということをやりたいくないという心理が働くわけだが、かといって抽象的な音響として声を扱うという、モダニズムの文脈においてさんざんやられてきたアプローチも全く退屈だとすればはたしてどうすればよいか？というわけで、6年ほど前に「語りもの」において始まり、今もまだ未知の可能性をそこに感じている自己言及というアプローチが浮上してくる。本来は「語りもの」の新作において展開させる予定だったコンセプトを、一足先に「語りもの」ではないがその周辺に位置するこの作品で試みようというわけだ。そしてまた、チューバという僕にとって今回初めて向き合う楽器をどうするか、というもう一つの問題もあった。この作品で耳を傾けていただきたい聴取の焦点は、バリトンとチューバとの関係性にある。二者の関係性の糸が、寄り添ったりずれたり、絡んだりほぐれたりというその様相を観察すること。そのための媒介として、物語らしきものの断片も立ち現れるであろう。最後に、今二者とிட்டが、バリトンの歌唱と歌う内容との間にもずれがあるため、実は二者ではなく、歌唱、テキスト、チューバの三者の関係性なのだということも言い添えておきたい。【鈴木治行・記】

### 松平頼暁：ローテーション I

低音デュオの委嘱により作曲。演奏順が決まっている10頁と、後半のどこかで演奏される1頁から成る。順序が確定している10頁は上下逆に読むと、ソプラノとサクソフォンのための「Rotation II」になる。IもIIも、テキストは猿田長春訳詩の「しでなし ごでなし ろくでなし」から「みたいところに」(I)と「みないをとこ」(II)によっている。不在や不在願望をうたうテキストに対して「彼は常に我等と共にあり」という言葉が、英、独、仏、伊と日本語で語られる。【松平頼暁・記】

みたいところに  
よみびとしらず

ああ みたいところにみられるなら  
いまみないところにみられるのに！  
いまのところにみなきゃならないので  
みたいところにみられない

### 演奏会情報：

松平 敬：双子座三重奏団クリスマス・ライヴ？ 2010/12/5 19:30- アート・カフェ・フレンズ

橋本晋哉：NHK-FM「名曲リサイタル」2010/12/18 19:20-21:00（放送予定）